

―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

万葉の川心 第11回

船田 園子

相模国の歌へ東歌へ

ま愛しみ さ寝に吾は行く

鎌倉の 美奈の瀬川に 潮満つなむか

(巻第一四 三三六六)

遠雷が耳をかすめた。小さいけれど確かな硬い響きが乾いた空をわたってやってきた。音のする方へ目をやるとまるとまるい空の端が、とおく、黒い雲に覆われていた。が、ここまで来そうにはなかった。それを確認して背を向けた。けれど、遠雷が残した不安は消えない。不安の正体はなんだろう。雷でなく、夕立てなく、しあわせの片隅に黒い影の潜んでいることを突然知らされたような。「なんでもない」といきかせて足を速める。

「美奈の瀬川」は、鎌倉市深沢の山中に源を発し長谷を通って由比ヶ浜に注ぐ現在の稲瀬川である。今では小川となっているが、万葉の時代にはもっと大きな川であったらうと推定されている。

川を隔てて恋をする男女にとって、川の状態は逢えるか逢えないかの大きな問題となる。時には二人の仲を裂く障害にたとえられ、そのために、より激しく募る想いが万葉の歌にも詠まれている。また、「瀬」は、浅くて歩いて渡れる所という意味と、流れの早い所という意味がある。前者から「ものごとに出会う良い機会」という意味にも使われるようになり、



男女がひそかにあうことを「逢おう瀬」ということを見ても、「川」と「恋」は深い縁で結ばれている。

「愛しい娘よ。そのかわいさに、共寝しにでかけていく。鎌倉の美奈の瀬川には潮が満ちているだろうか。」

「しほひ」(引き潮)と「しほみち」(満ち潮)の景に、人は何を思うのだろう。万葉集の中にも、引き潮や満ち潮による心の揺れをあらわした歌がいくつもある。一般には潮が引いて広々とした砂浜は、明るくのびのびとしたイメージを抱き、反対に満ち潮は迫りくるような不安なイメージを抱くといわれる。この歌は、満ちてくる潮の不安が恋の不安を呼びながら、なお抑えきれない愛しさをそのままに詠んでいる。雲ゆきの怪しさ、風の強さ、川の流れの足元をすくわれるような速さは、人の心に不安を呼び起こす。それがそのまま恋しい人への想いにつながり、恋の不安と重なり合う。けれど、不安さえも愛しくなるようなまっすぐな想いが、東歌からあふれ出ている。

潮の満ち干き、月の満ち欠け、花につけ、風につけ、川を舞台に、流れに心を映して人は恋をする。今も昔も。男も女も。「なんでもない」といきかせて足を速めた。遠雷の響きに、「会いたい」と思った。夏はもう、終わらうとしている。

